



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | ＜研究ノート＞初期近代英語における離接詞likelyについて：強意副詞による修飾の有無の変遷                                      |
| Author(s)    | 大津, 智彦                                                                              |
| Citation     | 大阪大学英米研究. 2018, 42, p. 111-122                                                      |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/99422">https://hdl.handle.net/11094/99422</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 初期近代英語における離接詞 *likely* について

### －強意副詞による修飾の有無の変遷－

大津 智彦

#### 1 導入

筆者は大津 (2016) において、(1) のように離接詞 *likely* が強意副詞に修飾され *very likely* のような形で現れるか、あるいはそのような修飾なしに (2) のように *likely* のまま用いられるかについて、1600 年から 1900 年代後半までのイギリス英語における歴史的変遷を主にフィクションをテキストジャンルとするコーパスを用いて調査した。その結果、①1600 年代では強意副詞を伴う比率が非常に少なく単独使用が大多数を占め、②1700 年代から 180 度の転換を起こしたがごとく強意副詞を伴う例が圧倒的多数を占めるようになり、この状態が 1900 年代前半まで続くが、③1900 年代後半からは単独使用が復活の兆しを見せ、それまでの 2 倍程度の比率で現れるようになった、ということが明らかになった。

(1) You may be very likely right in that. (1875 Jowett *Plato* (ed. 2) I. 21 qtd. in *OED2*, “*likely* adv.”, Def. B2)

(2) You’re likely in the right, when blam’d by them. (1692 E. Walker *Epictetus’ Mor.* (1737) lvi qtd. in *OED2*, “*likely* adv.”, Def. B2)

さて、上記の結果からまず浮かぶ疑問は、なぜ 1600 年代には離接詞 *likely* の単独使用が盛んに行われていたものが 1700 年代以降急激に強意副詞との

共起使用に変わったのか、という点である。大津（2016）においては小説、演劇、日記などインフォーマルな特徴を備えていたり、口語的傾向が高いテキストのみをコーパスとして用いたので、この問題を解明するにはテキストのジャンルを文語的でフォーマルなものまで幅を広げ、より詳細に調査する必要が生じた。ただ、離接詞 *likely* は小説などと比較すると、文語的でフォーマルなテキストに出現する頻度が数分の一になることが大津（2011）の *The Corpus of Historical American English* を用いた調査経験から予想される。さらに具体的に言えば、二桁以上の用例を抽出するためには 1,000 万語以上の規模のコーパスが必要となる。このことから *The Helsinki Corpus* や *ARCHER* など英語史研究用に編まれた数十万から数百万語規模のコーパスは残念ながら使用できない。そこで今回使用することにしたのが、*OED Online* と Gale Cengage Learning が提供する *Eighteenth Century Collections Online* の 2 種類の資料である。なお、いずれのデータベースも大阪大学図書館の電子リソースにアクセスして利用した。次のセクションでそれぞれのデータベースのコーパスとしての使用に関し説明を加えておきたい。

## 2 使用したデータベース

### 2.1 *OED Online*

*OED Online* は簡単に言うと *Oxford English Dictionary* を WEB 上で検索可能にしたものである。しかし、*OED* 第 2 版のプリント版や CD-ROM 版とは異なり、3 ヶ月に一度、既存の記述の見直しや新語の追加が行われる。実際、本稿のテーマである離接詞 *likely* に関しても、*OED* (2<sup>nd</sup> ed., CD-ROM) では “Now chiefly **most likely**, **very likely**; otherwise rare exc. *Sc. dial.*, or (freq.) *N. Amer.*” としているのに対し、*OED Online* では “Frequently in **most (also very) likely**.” という具合に語法についての記述を変えている。

さて、*OED* が擁する膨大な数の引用文 (quotations) をコーパスとして利用するアイデアはそれが 1987 年に初めて CD-ROM 化されて以来、必要な

注意を払うことを前提に受け入れられてきたと言ってよい。*OED* をコーパスとして用いることの評価については Hoffmann (2004) に詳しく論じられている。注意点としては、

- ① *OED* の引用文は語義や用法を明らかにするため載せられたものであり、言語のサンプルとして言語学的に明解な基準に従って選別されたものでない。具体的には次のような問題があげられる。
- ② *OED* には多様なテキストジャンルの引用文が含まれているものの、特定の作家からの引用への偏りがある一方、労働者階級のことばなどがほとんど引用されていないなどコーパスとしてはバランスの取れた representativeness に欠ける。
- ③ *OED* の引用文の約 20% は文の断片が省略された短縮文となっているため、特に節をまたがる構文の研究においては問題となる。
- ④ Hoffmann (2004: 25) のグラフから分かるように引用文の数が年代によって異なる。年代毎の引用文の平均語数も出ているのでノーマライゼーション (normalization) を行うことは可能であるが、上記①から③の点を考えるとその結果出された数値は一般的な傾向を表すものと解釈すべきである。

Hoffmann (2004) は、*OED* のデータが創作されたものでなく自然に起こったことばであること、そしてカバーされる時代が他のどんなコーパスよりも長期に渡ることを考えると、大規模なデータを必要とする研究者にとっては上に挙げたデメリットも考慮に入れた上でのコーパスとしての使用を勧めている。

導入で述べたように今回の調査を行うにあたってはテキストのジャンルを口語的なものから文語的なものまで広げること、またコーパスが大規模である必要があるという事情から、①から④に挙げた点に注意をしながら *OED Online* の使用が第一の選択肢となった<sup>1)</sup>。

## 2.2 *Eighteenth Century Collections Online (ECCO)*

*ECCO* は 18 世紀にイギリスで出版された書籍、パンフレット、エッセイ、新聞などを WEB 上で検索可能にした Gale Cengage Learning が提供するサービスである。収録されているタイトルは 180,000 以上、ページ数が 3,300 万を超える巨大なデータベースである。全て当時出版されたオリジナルをスキャンし、その画像そのものを検索して読むことができるようになっている。文書は History and Geography, Fine Arts, Social Sciences, Literature and Language, Religion and Philosophy, Law, General Reference, Medicine, Science and Technology に分類され、全分野もしくは各分野毎のキーワードによる全文検索が可能である。

*OED* と同様にこのデータベースは言語学的な研究を目的に構成されたものではないので、ことばの研究道具としてはテキストジャンルの偏りや後述するように検索において大きな不便さを伴うなどの欠点を持つ。しかし、18 世紀のイギリス英語を調査するにあたっては他に例を見ない規模は大きな魅力である。この調査では *OED Online* を補完して、18 世紀のフォーマルな書き言葉をより詳しく調べる目的で使用した。

## 3 調査結果

### 3.1 *OED Online* の検索結果

今回の調査は、文中に現れる離接詞 *likely* を強意副詞の *very* などが修飾するかしなないかという点において、なぜ 17 世紀と 18 世紀とでは全く異なるのか、その変化の機序を解明することが目的である。よって、*OED Online* を検索するにあたっては、1601-1700 年と 1701-1800 年のふたつの時代を指定した上で、*likely* をキーワードとして引用文の全文検索を行なった。検索結果は離接詞 *likely* を含む引用文のみを列挙して出力してくれるので便利ではあるが、当然のことながら *OED Online* には文法標識などのタグ付けはされていないので、出力された引用文から離接詞 *likely* を含むもののみを手作

表 1 離接詞 *likely* を修飾する強意副詞の有無：時代別頻度

|       | 強意副詞<br>あり | 強意副詞<br>なし | 合計 |
|-------|------------|------------|----|
| 17 世紀 | 1          | 6          | 7  |
| 18 世紀 | 6          | 1          | 7  |

表 2 離接詞 *likely* を修飾する強意副詞の有無：時代別頻度

|       | 強意副詞<br>あり | 強意副詞<br>なし | 合計 |
|-------|------------|------------|----|
| 17 世紀 | 2          | 12         | 14 |
| 18 世紀 | 15         | 0          | 15 |

(出典：大津 (2016:31) 表 1 の一部抜粋)

業で抽出した<sup>2</sup>。なお、この際にアイルランドやアメリカなどイギリス以外で発行された出版物からの引用文は除外している。

結果を表にまとめると表 1 のとおりとなる。比較のためフィクション、演劇、日記など口語よりのコーパスを使用した大津 (2016) の検索結果のうち 17 世紀と 18 世紀にあたる部分のみ表 2 として掲げておく。

今回の *OED Online* を使った調査 (表 1) は formality の高いテキストを検索し、前回検索したフィクション、演劇、日記などインフォーマルで口語性の高いテキストの調査 (表 2) からは見えてこなかった歴史的推移の謎の解明に近づくことだった<sup>3</sup>。しかし、ふたつの表を見比べればすぐ分かるように両者は全く同じ傾向を示しているのである。つまり、17 世紀には *likely* は圧倒的に単独仕様が多く、18 世紀には 180 度急激に転換し、*likely* は強意副詞と共起することが圧倒的に多くなる。そこに用いたコーパスがインフォーマルで口語的であるとか formality が高く文語的であるかは無関係なのである。

では、テキストジャンル以外の観点からの分析は可能だろうか。*OED Online* から抽出した用例数が比較的に少ないため、17 世紀と 18 世紀の引用文を以下に年度順にすべて掲載したい。なお、これら引用文がほぼ全て formality の高い文書から抽出されたものであることは同時に示した出典から明らかである。

## 17 世紀

1603 S. Harsnett *Declar. Popish Impostures* 80 Thyrcæus. . likely dooth Cantle all Exorcists by himselfe.

1647 J. Trapp *Comm. Epist. & Rev.* (1656) (1 Cor. xv. 51) 701 This, likely was one of those wordless words [ἄρρητα ῥήματα: 1611 unspeakable words] that Paul heard in his rapture, 2 Cor. 12. 4.

1648 W. Montagu *Miscellanea Spiritualia* 136 Detraction and piquantnes of wit, doth likely first make proffers to issue out of our corrupted nature.

1655 H. More *Antidote against Atheism* (ed. 2) App. xi. 374 Bodies..in a confused agitation may very likely go together as we see done..in the subsidency of this dreggish part of the world, the Earth.

1659 Milton *Civil Power in Wks.* (1851) 329 Those ends which he can likely pretend to the interposing of his force therin.

1674 N. Fairfax *Treat. Bulk & Selvedge* 73 It does likely hold up, as we say, by that time the Shrewshave dined.

1690 C. Ness *Compl. Hist. & Myst. Old & New Test.* I. 236 Fragrant flowers and fruits, the sweet odours whereof had likely ting'd those goodly garments.

## 18 世紀

1718 H. Prideaux *Old & New Test. Connected* II. iii.187 The Author . . compiled the whole Book in the same Greek Language, and this proves that Author to have been a Hellenist also, and most likely he was of Alexandria.

1743 W. Ellis *Mod. Husbandman* Oct. xvii. 101 Almost every Shepherd . . will . . very likely plead: Such a Man tried a Thing, and it did no Good [etc.]; This is the common Lirry.

1764 S. Foote *Mayor of Garret* i. 3 Maims, bruises, contusions, dislocations, . . may likely ensue.

1765 *Museum Rusticum* IV. 74 The wool had then very likely gained weight

considerably.

1770 J. R. Forster tr. P. Kalm *Trav. N. Amer.* I. 288 To judge by these qualities the Tuckahoo may very likely be the Arum Virginianum.

1771 J. Murray *Serm. to Doctors in Divinity* iv. 242 A layman..will very likely have very different cases of conscience from a church dignitary.

1784 W. Herschel in *Philos. Trans.* 1783 (Royal Soc.) 73 257 The star of the 5th magnitude following  $\tau$  Persei..is most likely new, unless future observations were to favour the supposed motion of this star.

これらの引用文を統語面から見て注目に値するのは、最初のふたつ、つまり 1603 年と 1647 年の引用文において *likely* が助動詞または動詞の前に置かれているのに対し、それ以降は 1718 年の 1 例を除き、すべての引用文において *likely* は助動詞の直後に位置する点である。しかしこれは強意副詞による修飾の有無の推移と関係があるとは考えにくい。ただ、もうひとつ、離接詞 *likely* を修飾する強意副詞は *very* の頻度が *most* の 2 倍以上ある点は強意副詞による修飾の始まりを観察する上で注目しておきたい。

上に挙げた引用文をいくら眺めても、17 世紀、18 世紀全体をとおして強意副詞の有無の一点を除いてはお互いに極めて相似しており、18 世紀になってなぜ突如として *likely* が強意副詞の修飾を伴うようになったのかという謎を解く鍵は見えてこない。残念ながら、*OED Online* という現在使用する最大級のデータベースを歴史的コーパスとして用いても、離接詞 *likely* が 17 世紀から 18 世紀にかけて辿る劇的な変化の過程を解明するには至らないのである。

そこで、さらに多くの用例を収集するために使用したのが次のセクションで扱う *Eighteenth Century Collections Online* (ECCO) である。

### 3.2 *Eighteenth Century Collections Online* (ECCO) の検索結果

言語変化は *formality* が低く、口語的な書き言葉から始まりやすく、for-

formality が高く、保守的な書き言葉では遅れるのが一般的である。例えば、大津（2011）でアメリカ英語における離接詞 *likely* の用法の変遷を調査した際、20 世紀になって強意副詞の修飾がなくなり、*likely* の単独使用の比率が最も急激に伸びたのは fiction のテキストジャンルで、non-fiction ではその伸び率が最も遅れた。Fiction を主としたコーパスを使用してイギリス英語における変遷を調査した大津（2016）では、18 世紀には *likely* の単独使用は 1 例も見つからず（つまり強意副詞を伴う方向への変化が完成していた）、今回、*OED Online* を使った調査では単独使用は 1 例見つかっただけであるが、さらに数多くの formality が高く、保守的なテキストを調査することでより古い用法である *likely* の単独使用が見つかる可能性も捨てきれない。*ECCO* を用いた調査はそのような予測を持って実施した。

*ECCO* についてはセクション 2.2 で解説したとおりだが、規模があまりにも巨大であるため、今回の調査ではテキストジャンルを Religion and Philosophy に限定し、また、*likely* の単独使用が残存しているとすれば 18 世紀初期と考えられるため年代を 1701-1730 に絞った。*ECCO* は 18 世紀に出版された書籍類をまるごとスキャンしたものを集積し、キーワード検索をできるようにしただけのものなので離接詞 *likely* の抽出には非常に手間取った。上記条件で *likely* をキーワードにして検索すると、*likely* が現れる（形容詞 *likely* も含む）書籍類のタイトルが画面上にずらりと出力される。その総数は 5601 冊で 10 件毎の表示で WEB 上で 561 ページになる。その中から 1 冊 1 冊タイトルをクリックしてその書籍類を呼び出し、そこから *likely* があるというページ番号をさらにクリックしてそのページから *likely* を見つけ（緑色でハイライトはしてある）、それが離接詞かどうか判断するという手順である。書籍によって *likely* が使われている部分がひとつだけというものもあれば 10 くらいのももある。実際には形容詞 *likely* の出現が圧倒的に多く、離接詞 *likely* との比率は 30:1 くらいであった。このため、用例の抽出は強意副詞による修飾の有無を問わず離接詞 *likely* が発見できた最初の 10 例までにした。表 3 が検索結果である。

表 3 離接詞 *likely* を修飾する強意副詞の有無：ECCO の検索結果

|             | 強意副詞あり | 強意副詞なし | 合計 |
|-------------|--------|--------|----|
| なし          | —      | 2      | 2  |
| <i>very</i> | 6      | —      | 6  |
| <i>more</i> | 2      | —      | 2  |
| 合計          | 8      | 2      | 10 |

大津 (2016) の fiction をコーパスとして用いた調査結果では、18 世紀においてはすべての用例 (15 例) が強意副詞を伴うものであった。今回の formality の高いコーパスでも上の表から分かるように、1701-1730 年という 18 世紀の初期の段階でもう既に強意副詞を伴うケースが 10 例中 8 例を占める。より保守的と思われるテキストでもこの時期に強意副詞ありへの移行がほぼ完了している。一体、17 世紀と 18 世紀との間にある強意副詞の有無の大きな差はいつの間にどのようにして生まれたのだろうか。ECCO を検索しても結局、明快な答えは得られなかった。

しかし、何の収穫もなかったわけではない。表 3 の強意副詞なしの 2 例は次の (3)、(4) のような形を取っている。

(3) ... they would likely have ask'd, *Where in the City*.<sup>4</sup>

(4) ... they might likely have found the Secret before Sir Samuel Morland.<sup>5</sup>

2 例とも「助動詞の過去形 + *likely* + *have* + 過去分詞形」の統語形式を持っており、この形式に *likely* の単独使用が残る傾向があった可能性がある。また、表 3 からわかるように OED Online の検索結果と同じく強意副詞として *very* の頻度が圧倒的に多く、離接詞 *likely* の強意副詞修飾は *very* が先導した可能性が高い。これは強意副詞としての *very* の頻度の高さに関連しているものと思われる。

#### 4 まとめ

以上、大津（2016）から生まれた第一番目の問題、つまり、なぜ 1600 年代には離接詞 *likely* の単独使用が盛んに行われていたものが 1700 年代以降急激に強意副詞との共起使用に変わったのかを解明すべく、現在、17 世紀、18 世紀のイギリス英語研究に使用しうる最大規模のデータベースである *OED Online* と *ECCO* を検索して調査したが、今回は *formality* の高いコーパスを用いたのにもかかわらず、大津（2016）とほぼ同じ調査結果が生じた。つまり、今回の調査ではテキストジャンルの観点から、17 世紀と 18 世紀の間に存在する離接詞 *likely* を修飾する強意副詞の有無の急激な変化の機序に関する解明には至らなかった。ただ、統語的観点から変化を解明する糸口を見つけることはできた。ひとつは、強意副詞の修飾は *very* から始まった可能性が高い点である<sup>6</sup>。もうひとつは、例文（3）、（4）で見たように統語形式によっては強意副詞の修飾を受けにくく、文構造によって変化の速度に差があったと考えられる点である。

17 世紀と 18 世紀の離接詞 *likely* の用法の変化が筆者の興味を強く引くのはその *abruptness* である。しかし、調査をするにあたっては、17 世紀と 18 世紀における離接詞 *likely* の頻度の低さを痛感させられた。この *abruptness* の謎を解くには、17 世紀と 18 世紀のイギリス英語コーパスにおける規模と使い勝手の両方におけるさらなる発展が必要である。

#### 注

- 1 *OED* が全体として史的研究に資することができる大規模コーパスであるとは言っても、ここで断っておかなければならないのは、各時代のコーパスの規模である。Hoffmann（2004：25）は *OED* 2<sup>nd</sup> ed. の引用文の総語数を 3,300-3,500 万語と見積もっている。そうすると Hoffmann（2004：25）の *Figure 1* から見て 17 世紀と 18 世紀それぞれの時代の語数は多くて約 700 万語位と思われる。大津（2011）でアメリカ英語における離接詞 *likely* の史的要変を扱った際に用いた *Corpus of*

*Historical American English* (COHA) では 19 世紀が 1 億 3,200 万語、20 世紀が 2 億 4,500 万語であった。よって収集できる用例数は大津 (2011) と比較して少なくなることが予想される。しかし、17 世紀、18 世紀におけるイギリス英語の現実の使用例を比較的容易にコーパスとして検索できるデータベースで規模において *OED* に勝るものはない。

- 2 Advance Search に Part of Speech の項目があるがここで副詞を選んでも離接詞 *likely* が出力されるのではなく、副詞の見出し語を例証するために挙げられている *likely* を含む引用文が出力されるだけである。
- 3 テキストジャンルを重視するのは大津 (2011) でアメリカ英語における *likely* の変遷を調査した際、それが大きな役割を果たしていることを確認しているからである。
- 4 Baltus, Jean François (1709) *An answer to Mr. de Fontenelle's History of oracles. In which Mr. Van-Dale's System concerning the Authors of the Heathen Oracles, and the Cause and Time of their Silence is confuted: and the opinion of the Fathers upon that subject vindicated. Translated from the French. With some reflections upon the remarks of Mr. Le Clerc, in his Bibliotheque Choisie, In a Preface. By a priest of the Church of England. To which is prefix'd a letter to the translator, by the Reverend George Hickes, D. D.* London: printed by W. B. for Henry Clements at the Half-Moon in St. Paul's Church-Yard, p.327.
- 5 Wells, E. (1717) *An help for the more easy and clear understanding of the Holy Scriptures: being the two gospels of St Matthew and St Mark, Explain'd after the following Method, viz. I. The Original or Greek text amended according to the Best and most Ancient Readings. II. The common English translation render'd more agreeable to the original. III. A paraphrase, wherein not only the Difficult Expressions and Passages are explain'd; but also Each Gospel is divided into Proper Sections and Paragraphs; and withall it is observ'd, What Gaps or Omissions are in each Gospel, and how Supply'd by some other Gospel; and what Passages are not plac'd Aright as to Order of Time. To the End of the Paraphrase is subjoin'd a Synopsis of the Contents of Each Gospel. IV Annotations relating (as Occasion requires) to the Several Particulars afore-mention'd.* Oxford: printed at the Theater, for James Knapton at the Crown in S. Paul's Church-Yard, London, p.411.
- 6 *OED Online* の定義では、“Frequently in *most* (also *very*) *likely*” とあり、*most* が先行している。

参考文献

- Austin, F. (1996) "Points of Modern English Usage, LXXII." *English Studies*, Vol.77, No.1 : 101-2.
- Eighteenth Century Collections Online*. Gale Cengage Learning. Web. August 2017.
- Hoffmann, Sebastian. 2004. "Using the OED Quotations Database as a Corpus—A Linguistic Appraisal." *ICAME Journal* 28 : 17-30.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Mair, Christian. 2004. "Corpus Linguistics and Grammaticalisation Theory : Statistics, Frequencies, and Beyond." *Corpus Approaches to Grammaticalization in English*. eds. Hans Lindquist and Christian Mair. 121-150. Amsterdam/ Philadelphia : John Benjamins.
- OED Online* (2017) Oxford University Press, 2017. Web. August 2017.
- The Oxford English Dictionary*. 2009. 2nd ed. CD-ROM. Vers.4.0. Oxford : Oxford University Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow : Longman.
- 大津智彦 (2011) 「アメリカ英語における離接詞 *likely* の用法 : 1810 年から 2009 年までの変遷」『通時的・共時的英独コーパス言語学のインターフェイス』(大阪大学言語文化研究科) : 1-7.
- 大津智彦 (2016) 「イギリス英語における離接詞 *likely* の用法 - 1600 年代から 1900 年代後半までの変遷 - 」『英米研究』(大阪大学英米学会) : 27-45.